



愛隣幼稚園・・・・・・・・・・・・・・・・

# 園だより

・・・・・・・・・・・・・・・・ 11 . 4月号

## 子どもたちの笑顔

3月11日に起こった大地震。全ての事が私たちの想像をはるかに超えその被害は甚大なものとなりました。テレビから映し出される映像はどれもこれもこれが現実かと思われ、言葉を失い涙は止まりませんでした。少しずつライフラインの復旧が進み、明るい兆しが見えたのも束の間、また大きな余震に見舞われてしまいました。毎日毎日、私に何が出来るだろうかと考える日々が続く中、テレビ画面にはもうすでに前を向いて歩きだしているたくさんの子どもの笑顔が映し出されていました。多くの大人たちが茫然と立ちすくみ、失ったものの大きさに心砕かれ、明日の不安に一歩を踏み出せずにいる時でした。生きようとする命の力強さに、守らなければならない私たちが勇気をもらい、励まされました。しかし一方で、本当は声を上げて泣きたいだろうに、その小ささ、弱さゆえ無意識のうちに働く防衛本能が、彼らを奮い立たせ、笑顔にしているのではないかという思いにも駆られました。この子らの笑顔は確かな安心の中から生まれてきたものではないことを、私たちは忘れてはならない。でも、そんな事は百も承知で、なお、私たち大人は子どもたちの生きようとするエネルギーと、笑顔に救われているのです。

4月7日、愛隣幼稚園は始業日を迎えました。ひとつ大きくなった子どもたちは私の「大きい組さん、おはようございます！」「赤いバッチのお姉さん、おはようございます！」という言葉に相好をくずし、恥ずかしさと誇らしい気持ちの入り混じった笑顔で門をはいっていきました。その後、穏やかな春の陽射しと満開に近づいた桜の木の下で確かに“大きくなった子どもたち”が、この時を楽しんでのびのびとあそんでいました。ひと月前と違うのはバッチの色だけなのに、くろーばー組(去年の年長組)の子どもたちが卒業した後の園庭の風景とは、明らかに何かが違っていました。ゆったりと優しい時間が流れていました。しかしこれも束の間の事。4月は新しい出会いの時、そして大好きなお家の人から離れて歩き出す別れの時でもあります。「別れ」とはまた大げさな・・・と思われる新入のお家の方もいらっしゃるでしょう。いえいえ大げさではありません。お家の人の手から、担任の手に子どもたちが託される時、子ども涙、親も涙(見た目にはわかりませんが)は例年見かける光景です。今週から朝の園庭は賑やかになることでしょう。辛い別れと様々な出会い。その中で新入の子どもたちだけではありません、昨日まで優しい時間を満喫していた進級の子どもたちも、心穏やかでない日々が始まります。自分が自分でいられる場所を探し、安心して過ごせる仲間を探しての悪戦苦闘が始まります。あっという間に居心地のいい場所を見つけてしまう子もいるでしょう。なかなか自分らしさを出せずに居場所の見つからない子もいます。「ようちえんいかない。おうちにいる！」そんなことを言われたら、たとえ平静を装ったとしてもドキッとしない親はいません。それでもどうぞ平静を装い、行きたくない子の気持ちに寄り添いながら、送り出してあげてください。どの子も自分が自分で居られる場所を見つけられるように、私たちは子どもたちを支えています。人が心から笑顔になる時、そこには自分は自分でいいという自己肯定感と、仲間はいいという人と繋がる安心感があります。これは人を支える大事な基盤です。だからこそ心から笑いあえる、笑顔になれる居場所をひとりひとりの子どもたちと探していきたいと思えます。

たくさんの事を考えたこの1ヶ月。守るべき子どもたちの笑顔に励まされている大人の不甲斐なさを痛感しています。私たちにはすべての子どもたちの未来に責任があります。安心して心の底から笑いあえる未来を私たちが築き残していかなければなりません。今、私たち大人を支えているこの笑顔を守るのは私たちです。